

20100821 マイスターネット

# ある置き手紙

Une letter laissée

報告 長谷川 晃

## はじめに

人類社会の歴史的な変化は、地上の諸地域に住む人間集団の、必然と偶然との組合せなどによる、相互の複雑な出会いによって加速されてきた。

ここでは、日本人が、現在、フランス共和国と呼ばれている西ヨーロッパの主要な一つの国家と、何時頃、どのように出会い、その後、どのように影響しあって来たかの、その、ごく初期の部分と、最近の一般的な状況とを見ることになる。具体的には、この報告の前半では、その接触の初期、と言うより、まだ接触が具体化していない段階で、その国の言語による手紙を、日本人が解読しなければならなかった事件があり、それを、先ず、ここでは、具体的に、その時期の経緯を辿りながら見ることにする。しかも、それは、日仏の交流としてではなくて、北方の大国ロシアと日本との、微妙な利害対立の場面で、意思伝達の手段、機能として、その国、フランス共和国の言語、フランス語が、一種の国際語として作動していたことで始まったのだった。

アントン・チェーホフの名作戯曲「桜の園」では、フランス語が、帝政ロシアの、上流社交界の交際言語として描かれているが、その言語が、ロシア海軍若手将校の手で、北辺の領土問題にも登場していたのだった。

この報告の、問題意識の概要を、挙げると、項目として、以下の三点となる。

- A) フランス共和国というのは如何なる国であるのか。
- B) フランスとの接触が持つ、日本人にとっての意味と、その交流の現状。
- C) 何が契機で、両国が、その存在を相互に知り、どのような関係で推移してきたかなどの経緯の初期を、相互理解の手段である言語に絞って眺めることになる。

1800年代の初頭、明治維新の半世紀前、江戸時代後期の文化年間1806年、北方海域で、漁師たちの小競り合いと見られる事件があった。しかも、その軋轢の実態は、徳川幕府末期の日本と、帝政時代の、北の大国、帝政ロシアとの間の相互認識が、北方、辺地での、沿岸漁民の水産漁獲物をめぐる殺伐な、相互妨害事件によって、実質的に始まっていたことを意味している。

フランスと日本との遭遇の視点で、その事件の経緯を辿ってみた。

- 1) フランス語の最初の手紙は、ロシアの海軍将校が書いたものだったが漁師たちの作業小屋の襲撃、焼き討ち現場に一種の脅迫状の形で発見された。

- 2) 後日、事態を総合すると、日本との通商を求めて長崎へ来航したロシアの特使ラクスマンが、交渉を拒否された腹いせに、部下の、海軍将校であるフヴォストフに命じて実行させた暴行の結果と見る事が出来た。
- 3) 幕府当局者は、松前、江戸ともにその手紙を読解できなかった。
- 4) 長崎までそれを送り、オランダの商館長ドゥーフに読解を依頼した。
- 5) ヘンドリック・ドゥーフは、それがフランス語によるものであることを確認したが、一読、事態で国際的緊張を察知し、文言を緩やかな表現に変えるなど、意図的な操作で、日ソの交流の濃密化を阻み、オランダの、それまでの立場を護るべく、その場を糊塗した。日ソの対立と和解により、オランダが疎外されない様に、事態の攪乱を企図したとも取れるのである。それを察して、手紙の本意を知るべく日本側は努力した。
- 6) 幕府は、手紙の言語がフランス語であることを知り、その言語の習得の必要を感じて、数名の若い日本人たちにその言語を集中的に学ばせた。
- 7) 相前後して、イギリスとの間にも、入港船に関して悶着があり、英語の習得の必要も、日本側は強く感じ、同様の措置を講じた。
- 8) こうして、日本人の、フランス、イギリスを始めとする、近代西欧諸国に対する関心と認識が深まっていった。
- 9) フランス語の手紙の、当時の訳文の文意等は、以下に別途詳述する。
- 10) フランスという国家の存在を知り、その国の実情の中に、日本人たちは、国家活動の近代化の端緒の一例を発見し、その国の言語を通して、その国の法制度、軍事知識などの吸収に努めた。

これらが、日本とフランスが今日のような交流関係に入る直前の国際的な状況だった。(日本が知るべき国は、この他にも、ヨーロッパでは、イギリス、ドイツ、イタリア、スペイン、ロシアなどであり、一方、新大陸ではアメリカ合衆国……と多数の国々があった。)

## フランスとの出会い（または、「ある置き手紙」）

～日本人は、最初、「フランス」をどうとらえたか～

長谷川 晃（国際総合研究学会副会長）

\* 日本人は、幕末、明治の初期に、その存在を知って、最初、「フランス（共和国）」という、この西洋の主要な文明先進国の名称をどのように聴き取り、どのように書き表したのだろうか？

France ……の、呼び方や日本語による表し方が、耳で聞いた音声を文字化する際に、（日本語の音声にはない、喉の奥の口蓋垂を振動させて出す [r] の音を含む、「フ・ラン・ス」の聴き取り音を、漢字表記またはカナ表記する際の当惑と混乱は大きかったと想像されるが、成り行きの中で、一定の方向へ収斂して行った結果）様々な工夫を経て、それは「ホロンス」、「払郎西（「フロース」）」、「法論西（「ハウロンス」）」、「佛蘭西」、「フランス」など…となっていくように思われる。（中国では「法国ファあ・クオウ」と言い、インドネシアでは「プランチス」と、「チ」に力を入れて呼んでいる。ドイツではフランスの国名は「フランク・ライヒ（フランク族の帝国）」である。）

日本での呼称が「フランス」、国名表示が、漢字では「佛蘭西」と落ち着きかけたときに、そして、それは、今は、一応、落ち着いているのだが、それでも、「佛」の文字が本来は「ほとけ」であるため、国名という「国際符号」としてではなくて、その意味を「深読み」したのか、一部で滑稽な現象を見せたこともある。「日仏協会」が、仏教関係者の集会を意味していると解釈する人が居たりして（鎌倉で）……（鎌倉の、ある禅宗の寺の若い偉丈夫の住職が、「日仏協会」の総会に出席して、レセプションで、卓上の握り寿司を、旺盛な食欲で平らげていた。フランスはどちらに居らしたのですかと尋ねても、要領を得ない返事しか返ってこなかった。好きな作家は、と尋ねたが、フランス語とは全く違う生活らしかった。仏教関係の有名人の集会と心得て、顔を出したものらしかった。フランスの大統領の名前にも無関心だった）

\* フランス語との最初の出会い……日本人が史上、国家的な相互認識を前提として、最初に手にしたフランス語の文書は、北海道北辺で、何者かに襲撃、焼き討ちされた、その土地のサケ・マスなどの漁師作業用具類の番人小屋、所謂、「番小屋」の被災現場に、帝政ロシアの海軍将校が書いて、置き手紙にしてあった、一種の、国際外交的な脅迫状だった。ただ、それが帝政ロシアの「国家の意図」だったかどうかは不明である。それは、北洋、北海道、千島諸島地域での沿岸漁業の、魚介水産物捕獲活動の軋轢現象の一つだった。それは、正確に言えば、フランス語との出会いだったけれど、同時に、一つの文明単位としての、「フランス」という文明集団との接触の始まりだった。

\* その手紙は、文化三年（1806年）十月、サハリン南部のアニワ湾に上陸して、日本人の村落を襲い、暴行、略奪をほしいままにしたあと、ルウタカ、エトロフ島ナイホ、シャナの各地でも同様に暴行を繰り返し、海上では、日本船を襲って、積荷を奪ったり、焼き討ちしたりしたロシアの海軍大尉ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・フヴォストフが、その暴行を行なったシャナ（紗那）に残っていたものだった。但し、この手紙には、日付、差出人名は記されていない。

\* この事件の背景を探ると、文化元年（1804年）ロシア皇帝の侍従で、国務大臣のニコライ・ペトロヴィッチ・レザーノフは長崎に使節として来航して、漂流民の仙台出身の津太夫たちを引き渡したけれど、江戸幕府からは、通商交渉を拒否された。そのため、心ならずも帰国したが、レザーノフは、改めて、武力行使によってでも目的を果たしたかったと言われている。そのため、彼は、部下の海軍大尉フヴォストフと「日本遠征」を試みた。然し、その行動に関して、ロシア皇帝の許可を得ていない不安から、途中で、独りだけ帰国し、この暴挙は、フヴォストフに、その初志を貫徹させようとした屈折した行動だった。

そこで、フヴォストフが総指揮官となり、フリゲート艦の「ユノナ号」と「アヴォス号」の二艦を率いて略奪、暴行を働いたのだった。しかし、その暴挙の現場には、当時、通念的には「国際慣行」に依拠する「適法」行為と判断され得る措置も行なわれていた。幕府は、「事件現場」に、フヴォストフの署名入りの、サハリン占領を明記した二枚の銅版と、無署名の三枚の文書が残されているのを発見したのである。文書は、ロシア語と、フランス語、満州語、それに、彼らが日本語と信じる、以下に見る（番人「源七」が口述で訳した）「難解な」書面だったと見られている。銅版の一枚には、「1806年10月10日、ロシアのフレガート、「ユノナ」が当地に来航し、一村落を『疑惑（スムニューニエ）』と命名せりとあり、もう一枚には「1806年10月11 - 23（新暦）日、ロシアのフレガート、「ユノナ」当地に来航、一村落を『好奇（リュボフィストヴォ）』と命名せりと記されていた。但し、日本側、つまり、幕府は、それが、所謂、近代国家間の「国際慣行」であるということも、意識的には理解していなかったと思われる。彼らには「近代国際法」の理念も乏しかった。

国際慣行では、近隣民族の言語による、同趣旨の手紙を添える場合がある由であるが、蒙古語とか中国語などによるものの書置きの存否は不明である。それは、ロシア側の態勢や能力を反映していると見てよいと察せられる。

こうした「無主と見られる土地に対する領土宣言」は、その頃、フランス人が東太平洋の「タヒチ」を領有したときの措置を想起させるものである。

\* 文化三年（1806年）シラヌシ（白主）巡視中の松前藩北蝦夷地支配・柴田角兵衛の報告で、事件を知った松前藩主は、江戸に速報し、函館奉行から南部、津軽、秋田など東北諸藩に出兵を要請し、およそ三千名の兵を室蘭などに

送った。幕府は事件処理のために若年寄りの堀田正敦をはじめ、探検隊の近藤重蔵などを、急遽、蝦夷に派遣したが、文化四年（1807年）三月、帰国中のレザーノフが病死し、その年の7月、フヴォストフもオホーツクに戻った事で、一先ず、事件は鎮まった。

\* 松前奉行所では、漁師の番小屋襲撃現場の置き手紙を誰も解読できなかったため、事態の重大さを察して、その手紙を、早飛脚で江戸へそのまま送った。江戸幕府は「通詞」に読ませたが、彼等もその手紙を読解出来なかった。已むなく、幕府は、「現物」を早飛脚で長崎奉行宛てに転送して、その解読を命じた。

\* 長崎奉行所にも、それを解読できる「通詞」が居なかった。奉行はそれをオランダ商館へ持ち込み、商館長ヘンドリック・ドゥーフに読解を依頼した。

\* オランダ商館長のドゥーフは、それがフランス語であることを指摘し、一読、日露間の国際緊張を予感した。彼は、日露の交流の濃密化による、オランダの日本での地位（の国際的な低下）を案じて、政略的に計算し、事態を穏便に解釈できるように「柔軟訳」を捏造した。（文意を変更できないので、書簡で用いられている用語や、語気を柔軟化した。）

日本側は、オランダ人の、その発音から知った、「ホロンス」と聴き採れる国の言葉の習得を、国家の緊急必要事と感じて、ドゥーフに教授方を懇願した。そのため、日本人が最初に用いたフランス語の辞書は、ドゥーフがオランダから持ってきていた蔵書の中の「蘭佛辞典」だった。日本人はそれを筆写。即席の教師がオランダ人だったから、日本人のフランス語の発音もオランダ語訛りだった……。こうして日本人のフランスとフランス語理解が始まった。

\* その頃、英国船「フェートン号」が、オランダ船舶を装って（オランダの国旗を掲げて）長崎港に入り、偽計を持って生鮮食品や飲料水を不法に補給した事件があり、日本人による英国船の焼き討ちと、相手方からの報復行為など、日英人の険悪な睨み合いとなった。そうした長崎の、世情不安の責任で、担当奉行が切腹した。それによってわが国でも、逆に『エゲレス語』習得の必要性も高まった。

\* 江戸政府は、日本人のフランス語や英語の摂取能力培養努力のために、全国の各藩に宛てて、若手の留学生の、それぞれ十名の、長崎への派遣を命じた。

\* そうした努力の過程で、日本人が、初めて公式にフランス語とフランス様式の行動の必要を迫られた課題は、言語の習得と併せて次のような事項だった。

1) 外交文書の作成 双方の意図の国際的な公式確認：条約、外交関連用語、書式（蒙古、中国などとの約定と比較し）を駆使できること。

2) 外交儀式典（プロトコール）の理解 上座（かみざ）上席はどちらか？ 代表的な人物を迎えた際、お互いの尊厳に敬意を払いつつ要件を談じ合う、国際社会における共同行動の際の、動作の慣行を知り、融和を心掛けた。

- 3) 集会の形式と儀礼 晩餐会・舞踏会などの実施要領、洋式雛壇、整列、着座の位置・順位、会食の配置、神道・仏事などとの礼拝様式の違いを確認した。
- 4) 先進技術としての軍事知識の導入 ナポレオンの軍学 弾道力学の学習。
- 5) 民法法典の模索 ……大名統治という、地方的な分権統治方式を排して、中央政府が組織的に国家を統治する時代に移り、日本が市民社会に移行する趨勢の中で、そうした社会の生活秩序の枠組みの「雛形」としての、
- 6) ナポレオン法典の解釈と民法の導入の必要性が痛感された。

但し、ナポレオン法典は、精緻な法的規定というよりは、法を必要とする社会事象の現実を、一定の秩序に纏めるための「法の精神」とでもいう、根本理念を述べているに過ぎなくて、法の運用に際しての「民族的特性」は、基本的には排除していないと言われている。ナポレオン・ボナパルト自身は「規定は『オブスキュール（漠然とした）なもの』で良い」と平素から言っていたと伝えられている（ドミニコ会の修道士として来日し、後に「還俗」して日本に定住し、上智大学で哲学を講じていた、ガブリエル・メランベルジェ教授による）。つまり、ナポレオンは、末端実務官僚の資質と知性に期待していたとも見られている。

これは、法社会の姿に、英米、フランス、ドイツなどで、それぞれ、理解できる立場があって、それらが民族とか、その文化の特徴になっているのだが、「厳格なドイツ・ゲルマン法」と「融通無碍な英米法」の中間にあって、「知性の鋭さと、人間精神の柔軟さを保とうとするフランス法」とでも言った区分の、『法思想』に関わる、人間社会の捕らえ方に関わる大きな論議の材料でもあって、それらは、何れも、種々民族の「人間観」の反映である。そして、ヨーロッパの人間たちには「ヘブライ法」とか、圧倒的な、大帝国の骨格であった「ローマ法」を想起する精神的傾向が強かった。（日本では、「国の近代化」を急ぐ余りに、「人間社会の存続形態」に付いての固有の議論が省かれたまま、「独法」、「仏法」、「英米法」などという、学者の系譜の区別として並存していて、哲学的な基本姿勢が確定されないままで、今日に至っている。）

また、東洋人である我々としては中国の古代法とか、諸規定に、その民族の秩序思想を読み取ることが出来るが、その刑法で、古代ハンムラビ法典以来の、応報刑《タリオ **talio**（同害報復）》のあり方に苦勞の後が読取れると聴く。

法律の民族的な特徴は、諸民族の、現実処理に関する考え方の反映であって、彼らの思考の経緯は、「法制史」として考究すべき、別の重要なテーマである。  
\* 明治政府は、パリ、ソルボンヌ大学教授 法学博士、ヘブライ法の権威でもあった「ボアソナード」を招聘した。ボアソナードは、フランス語と法律（ヘブライ法、ローマ法、ナポレオン法典など）の講座を開いた。場所は、現在の、東京、丸の内「工業倶楽部」付近だったと言われている。

\* 市民秩序の基準とされた「新民法」の「一夫一婦制」への、日本人側での社会的戸惑い……「権妻（ごんさい）=妾」の解釈と、当時、妻妾の存在が、一般的でもあった社会情勢の中での「民法栄えて良俗滅ぶ！」の反発的な世論。

\* これらの過程で、日本の首脳部（江戸幕府）は、政府代表として、フランス公使ロッシュと接触したが、フランス共和国の側も、彼を通して、日本に対して、あからさまな介入を行なった。その過程で、日本側は軍事顧問団の派遣要請も行なった。（ロッシュは、アルジェリアの植民地化に成功した外交官の一人だったが、徳川幕府の要人との接触の際にも、近い過去の行動の際に参考にしたアラビア語のメモまで懐中に潜ませて、日本側との交渉に臨んでいたと記録されている。）また、イギリスともパークス公使を代表と見て接触した。

日本は、フランスとは、既に下関戦争などで、薩摩藩や長州藩が接触していて、徳川幕府はフランスの存在を意識して居り、国の近代化に利用する意図を抱いていたと見られている。

### 日本側が、散発的に習得した『西洋事情』

\* 横浜・野毛山の「農兵」訓練と「ノーエ節」と浦賀に造船所の建設の促進。

\* 軍隊の号令の模倣：「頭右(カシラー・ミギ)！ **la tête à droite**」（米軍は **Eyes right!**）と、海軍の漕艇訓練の際の「オー・エス **Oh, ici!**」など。

\* 国際電信符号と船舶相互間の旗硫（きりゅう）信号とアルファベットによる交信技術の習得の必要性。

\* アルファベットの口承 **A antoine, B brigitte, C césile ...**

\* 艦船間相互連絡 手旗信号と発光信号（一定距離で、無線装備が無いとか、電子的な傍受を秘匿する必要がある場合に用いられていた）

\* 公海上における、軍事船舶相互の交信実例（四国沖、日英軍艦相互）

「キ・エ・ヴォートル・コマンダン（フー・イズ・ユア・コマンダー）？」

**Qui est votre commandant?** 「艦長は誰ですか？」

「オン・プー・サリュエ（メイ・アイ・サリュート）？」

**On peut saluer?** 「礼砲を発射して宜しいか？」

「シル・ヴ・プレ！」 「アプレ・ヴー」 「ボン・ボワイヤージュ！」

（プリーズ！） （アフタ・ユー） （グッド・ジャーニー！）

**S'il vous plaît!** **Après vous!** **Bon voyage!**

「どうぞ！」 「お先にどうぞ！」 「行路の御平安を！」



## フランスが日本に与え、日本人が受容した知識や日本での諸現象

- \* 近代科学の一つの門 ……医学研究 野口英世、パスツール
- \* 文学の発見、象徴主義文学と人生哲学、精神と情念の分析、芸能、芸術の発見、服飾、美食、ファッションと大衆芸能(シャンソン・歌謡)の大模倣。「ミイラ取りがミイラになった」現象も種々の分野であった(覗き込んでいるうちに、対象に魅せられて、自分自身が、その眺めて、観察している対象の特性に染まってしまう現象が見られた。文化的影響とは、そんなことなのかも知れないけれど……)。歴史、法律、科学、学芸知識の軽視(米英の影響)、個人的趣味への傾斜的耽溺、その圧倒的で、複雑な接触の結果としての、見失われた冷静な広い視野。
- \* 第二次世界大戦後のフランスの国際的地位の相対的低下。
- \* 独自性の自負 科学技術とフランスの水準、フランス的国際エゴイズム。

## 日本で、今も続く、庶民のフランス語受容の特徴

- \* 英語の圧倒的な影響下での、趣味と実益の間の彷徨い(外観の模倣)
- \* 知的装飾品獲得のための、大学の「仏文科」(知的迷彩と自己陶醉)
- \* フランス語に対する関心が、一種の現実逃避、高級錯覚を呼ぶ場合があった。
- \* それは、お洒落(*à la mode française* ア・ラ・モード・フランセーズ) 美食、文通、交際、芸能活動(シャンソン・ブーム)、美術製作、作詩、文芸創作活動などに顕著。
- \* 「日仏協会」の、全国的な、澎湃とした誕生。在日フランス大使館文化部によれば、現在(2010年の時点で)日本の国内各地には「日仏協会」が誕生、存続していて、その数は五十に迫るといふ。但し、活動内容は様々である由。(構成員には、フランス又はフランス語圏での滞在経験があつて、その地域での生活への郷愁を動機に集まる者が多いが、言語駆使能力とか、フランスに関する客観的で正確な知識の内容と、関係者の資質は、個人的に大きく異なっている。フランスに対する片恋か、その姿勢に酔うことで満足するものも散見される)
- \* あくまでも予断であり、想定的な想像だが、フランスが植民地化した、アフリカの途上国や、アメリカ大陸にあつてヨーロッパからの投機的な人物によつて、文字通り開発されたミシシッピー川流域のニュー・オルリーonzやカナダ諸地域でのフランス人たちの行動の実態の経緯も、比較検討の対象になると思う。フランス人は、今でもニュージーランドを「巧く行かなかつたケベック(ケベック・マンケ) *le québec manqué* と言っているが、自分たちの価値観の国際的な拡張努力には、疲れを見せないものがあるとさえ思える。そうした、一種の「力」の根源は何なのだろう。第二次世界大戦で失つたインドシナにつ

いても、「ある夢の終わり」*la fin d'un rêve* として自己分析していて、狭隘で、素朴な歴史倫理観に逃避せず、地球人類の、生態の事実として歴史を眺める視座がある。

フランスを構成する「民族」は、歴史時代の初期、ヨーロッパ北部から、セーヌ川、ロワール川下流の肥沃地へ移り住んだ、フランク族の末裔であり、今のドイツの南部地帯を本拠地にしたカール大帝とも、シャルルマーニュとも呼ばれた大王が、今のドイツ、フランス、イタリアを総べる地域を支配した後、その末裔たちが、現在、近代国家群として、それらの土地を分割支配してきた経緯がある。十世紀冒頭（1027 - 87年）に活躍した、ギヨーム・ル・コンケラン（ウィリアム・ザ・グレート、ノルマンディー公）や、ナポレオン・ボナパルトなどの国際的な行動も、ヴァイキングや、ジンギスカンなどと同様に、人類の生態の一つと捉える歴史感覚は、ある意味では、自己を客観的に眺める姿勢として、興味のある視座ではなかろうか。

正義は、称えて、叫ぶだけのものではなく、工夫して、行動して、実現されるものと、彼らは考えているとみられると思う。

彼らは、第二次世界大戦では、首都パリも、国土の大半も、ナチス・ドイツの侵入軍に席捲され、占領されたが、国際政治の力学を背景に、そのドイツと戦って、国土と国家を回復した。そうした経緯の後の、自国の国際的な活動に関しても、彼らは、なお国際政治力学に関する考察を継続している。国家の生命力というものは、その様なものかもしれないと考えさせられる問題だと思う。

## フランスの素顔（国際的存在としての『フランス共和国』の特徴）

- \* エリ - ト育成国家（少数エリートによる集団牽引）
- \* 高等教育偏重（伝統教育思想）教育における競争と選抜
- \* 人材選抜方法：「高等学校卒業資格試験（バカロレア）」（中国の「科挙」に触発されたもの）
- \* 麦を中心とした畑作と酪農、家畜飼育などを組み合わせた大きな一農業国である一方で、高度な科学技術を駆使して、国際社会を精力的に遊泳している。
- \* 「哲学」と「数学」の重視：高等教育のための、上級科学と位置付けているだけではなく、天然自然、人文諸科学の分野にわたって、それらを、「哲学」は、思索対象や事象の「論理」を追求する「人文科学」として重要視し、同時に、「数学」を、「数値」で、対象や現象を論理的に捕捉し、考究する「人文科学」と位置付けている。
- \* 国家による人材育成機関「国立行政院」の維持、「多角的政治技術学校（エコール・ポリテクニク）...士官学校」などと、基幹要員の育成に努力。
- \* 国際的調整機関としての自負（地球人...という自覚、「枠組み」の責任者）
- \* 「フェデラシオン（連盟組織）」の議長又は調整役員を買って出る。  
（オリンピック組織委員会、国際柔道連盟、FIFA（国際）サッカー連盟、「UNESCO ユネスコ」、「世界遺産登録事務局」、NATO「北大西洋条約機構」の本部は、当初、パリにあったが、国際的な軍事バランスが、核保有の背景もあって、アメリカとソ連とを両極とするように変化したために、他国に移転した.....世界の「書記局」、「知性」としての自負と能力）
- \* 童話...国民的民話「ル・シャ・ボテ **le chat botté**（長靴を履いた黒猫）」  
...イソップ以来の伝統、ラ・フォンテーヌの知恵。（実利と名誉の維持のバランス感覚）
- \* 宇宙と人生を科学で捉えた先輩を持つ自負。  
デカルト、パスカル.....包摂的科学の自覚（ラ・テール、プラネテール.....「世界規模」と言うときに、「大地、地球規模」という言葉を使い、「国際的」とか「全人類的」と言おうとするときに、「地球的」とか「惑星的」といい、「グローバル」とは言わずに「プラネテール」と表現する。人類のいる場所を、「地球上」と言わずに、「惑星的」という表現を好む。「プラネットの発想」がある）
- \* 英米型プラグマティズムの非人間性への反省。
- \* 能率主義と人間主義の調和の努力。
- \* ローマ帝国、中国の秦漢代の政治統治思想（人間は政治的動物也）やアラブ地域に生き続けるイスラム文明の中で継承されている「科学思想」などを積極的に考究して、多数の人間で構成する国家集団の経営の巧拙を、歴史の中に読み取って参考にしようとする意識が旺盛である。（「温故知新」のフランス版）
- \* フランスは現在（2010年代の時点で）、人口は約5千万人と、日本のほぼ半

分、国土面積は74万平方キロメートルで、わが国の、およそ二倍の、麦作と牧畜を主体に農業を行ないつつ、諸分野についての諸科学の成果を、現実の生活に組み込む、知的な高度産業国家であって、国際社会にあっては、ヨーロッパで、イギリス、ドイツと並ぶ主導的な国家である。

なお、フランスは、DOM（海外県）、TOM（海外領土）と略称される、二つの形態の海外領域を支配している。

\* 原子核技術の先進国であり、核兵器の保有国であるが、その威力を背景にした国際行動は、今のところ見られない。

\* 原子核の核分裂で生じるエネルギーの利用については、核のからくりを読み抜いた科学者、マリー・エーヴェ・キュリーとその夫のピエール・キュリーに負うところが大きい。この、人類の「第二の火」の扱いの難しさについても、理解と自覚が一番深い国である。国内にも原子力発電所はあるが、放射能の人体への影響についても非常に敏感で、ロワール河の中流域の発電所の稼働についても非常に慎重であると伝えられている。また、ノルマンディーの、コタンタン半島のシェルブール近くにある、日本も依存している、核燃料物質の再処理工場も稼働はしているが、極めて慎重な作業によって行われている。ドイツも、核燃料物質の、所謂「核の灰」については、次の世紀に、新たに、その処理方法が見付かるまで、核そのものの利用を一時停止するという厳しい態度を採っているが、そうした、「科学は人間の幸せのためのものでなければならない」という、人類的課題の取り組みについても、この国の動静が注目されている。

## 問題の「怪文書」の、解読の経緯

- \* 文化4年(1807年)長崎出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフが、長崎奉行から、オランダ語に訳する依頼を受けたフランス語の書面の内容は、以下に転記の通りであるが、当時、江戸幕府も、長崎奉行もこれがフランス語の書面であるとは知らなかった。

(本文)

**Au Gouverneur de Matsumay.**

**La proximité de la Russie et du Japon a fait souhaiter des liaisons d'amitié du commerce pour la vrai bonheur des sujets de cette dernière puissance, pour quoi il fut envoyée une ambassade à Nagasakky. Mais le refus, qu'on lui a fait, offensant pour la Russie et l'étendue du commerce des Japonais dans les Isles Kourile et Sachalin qui dépendent de l'Empire russe, ont forcé enfin cet Empire de prendre d'autres mesures qui montrent tout, que les Russes peuvent toujours causer de dommage du commerce au Japon jusqu'à ce qu'ils soient mandés par les habitants de Ourope ou de Sachalin que les Japonais enfin souhaitent en commerce. Les Russes ayant causé cette fois si peu de dommage à l'Empire du Japon, ont voulu seulement leur montrer par cela que leurs Etats du nord peuvent toujours être investis et qu'un plus long entêtement de Gouvernement du Japon peut lui faire perdre ces terres.**

この手紙には、外交文書の通例として、自国語と、フランス語による同趣旨の手紙、相手国言語及び近隣民族または種族の日常語という「国際慣行」に添う形で、ロシア文とフランス語及び、満州語訳文、さらに日本語訳文が添えられていた。然し、日本語訳文は、無学な日本人、源七という番人に口述させたもので、松前奉行でも判読しかねた。

(註)このフランス語の手紙は、ある程度の知的訓練を受けた、外交文書の様式に熟達していると見られる人物が書いた手紙ではあるが、行間に「ロシア人のフランス語」という側面と雰囲気留着している。

\* 《源七の口述による日本語の訳文》

「近く近所のことには御座候。下々の者に申付け、渡海通商の事、こひねがひに遣し候て、朋輩同様に寄合吟味相談の上、通商首尾よく致し候はば、誠に仕合せに存候へども、たびたび長崎へ使者をつかわし候へども、只返事もなく、返へされ候故、異変はじめて此元の天下様よりおききしく腹立て、通商もなくば赤人同様にカラフト\*\*（数字不明）最取あげ申候、ならうならば返事のたよりにてすます事に御座候、唐太又はウルップまで赤人いつても行かれますによって、追散らしてやります。又はこひねがひの筋叶はせ候はは、末代ころやすく致たく心掛に御座候、左様御座候得ば、又々船に沢山に遣わし、此ごとくに致し可申候。」（原文をフランス語、ロシア語のいずれとしているかは不明）

\* 国際緊張を憂慮した、ヘンドリック・ドーフによる「柔軟訳」：長崎奉行所の訳文  
（ドーフがオランダ語に訳した文章を、長崎奉行が配下の日本人通詞に邦訳させたもの）

松前奉行へ

ロシアと日本は接壤するが故に二国の間に親密なる通商関係を結ばむとする希望生ず。

然して此事は殊に後者の臣民の幸福を増進すべし。故に此の目的を以って使節を長崎に送りしに無礼なる答書によりて拒絶せられ、且つ日本人は露国の領土なる千島及び樺太に交易を拓むるを以って、露国皇帝は終に己むを得ず、一の手段を取ることとなりたり。之によりて、露国人は日本人が終に得撫（Grup）又は樺太の住民より、彼等と露国人との通商開始を切望することを聞くまで、長く日本貿易に損害を与ふことを実地に証明すべし。露国人は日本に対するこの寛大なる手段によりて、日本国の北部が常に露国人の欲するままに打ち捨てられ、若し日本政府が依然として通商を拒否する時は、やがて其地を失ふべきことを知らしむるのみ。

（ほぼ正確に、来信の趣旨を捕捉しているが、本文の結語近くの「頑迷さ」（*entêtement* アンテートモン）が、ドーフ訳では、「依然として……変ることの無い」と、挑発性の薄い、柔軟な言葉に置き換えられている。）

この種の表現は、国際的暴力、即ち、戦争行為を開始する際、非は相手にあり、己む無く、当方も戦闘態勢に入ったという論理で戦争を開始するときの常套的な表現である。江戸幕府が、このような西欧的な戦時用語に疎く、又、部分的なものにせよ、外国と武力で対決する態勢になかったため、北方領土の領有に関する「日露戦争」はなかったが、「無知」が「大事」を回避させた、一つの珍しい国際事件だったと見ることも出来ると思う。

\* 現代日本語による試訳（この文書を、現代の口語に直して観察しよう）。

松前奉行へ

ロシアと日本は互いに近接した国家であり、その事実から、後者の臣民の真の幸せのために、友好通商関係の存続が希求されている。その故に、一名の大使が、長崎へ派遣された。然し、ロシアに対する非礼にも、その大使との接触は拒否された。又、ロシア帝国に帰属するクリル諸島及びサハリンに於ける日本人たちによる広範な商業行為に鑑み、事態は、当帝国をして、如何なることをも含む、別段の措置を執らざるを得なくしている。つまり、ロシア人たちは、ウルップとサハリン（樺太）の住民たちが、日本人たちは通商行為の実施を希求しているので認めてもらいたいと要請してくるまで、日本人の商業活動に対して常に障碍になり得るのである。ロシア人たちが、今回、日本帝国に対して行なったのは、ごく僅かの加害行為であったが、それは、こうした北辺の地は、ロシアが、いかなる時でも踏査、探索できるところであり、日本政府が、その頑迷さを、より長く続ける場合には、日本は、遂には、それらの土地を失うに至りうることを知らしめるための行為である（日付及び署名は、無し）

（長谷川試訳）

\* 来信本文の分析

**Au Gouverneur de Matsumay.**

**La proximité de la Russie et du Japon a fait souhaiter des liaisons d'amitié du commerce pour la vrai bonheur des sujets de cette dernière puissance, pour quoi il fut envoyée une ambassade à Nagasakky. Mais le refus, qu'on lui a fait, offensant pour la Russie et l'étendue du commerce des Japonais dans les Isles Kourile et Sachalin qui dépendent de l'Empire russe, ont forcé enfin cet Empire de prendre d'autres mesures qui montrent tout, que les Russes peuvent toujours causer de dommage du commerce au Japon jusqu'à ce qu'ils soient mandés par les habitants de Ourope ou de Sachalin que les Japonais enfin souhaitent en commerce. Les Russes ayant causé cette fois si peu de dommage à l'Empire du Japon, ont voulu seulement leur montrer par cela que leurs Etats du nord peuvent toujours être investis et qu'un plus long entêtement de Gouvernement du Japon peut lui faire perdre ces terres.**

- \* **la proximité** 両者は近接関係にあるので.....。
- \* **...a fait souhaiter** 希求させた。願わしい。
- \* **( les ) liaisons d'amitié du commerce** 友好通商関係
- \* **pour la vrai bonheur des sujets de cette dernière puissance**  
後者勢力集団の帰属民（臣民）たちの真の幸福のために（日本人の本当の幸せのために）。
- \* **pour quoi il fut envoyée une ambassade à Nagasakky. Mais le refus, qu'on lui a fait, offensant pour la Russie**  
そのために長崎へ外交使者を派遣した、然し、彼に対して行われた拒絶はロシア帝国にとっては失敬千万な行為である。
- \* **l'étendue du commerce des Japonais dans les Isles Kourile et Sachalin qui dépendent de l'Empire russe, ont forcé enfin cet Empire de prendre d'autres mesures qui montrent tout, que les Russes peuvent toujours causer de dommage du commerce au Japon jusqu'à ce qu'ils soient mandés par les habitants de Ourope ou de Sachalin que les Japonais enfin souhaitent en commerce.**  
ロシア帝国に帰属する千島諸島と樺太での日本人による商業行為の蔓延は（日本人たちは協定無しに、勝手に現地取引を行なっているの）遂に本帝国をして、別段、万般の諸措置を執らせざるを得ざる仕儀と相成った。即ち、ロシア帝国の要員たちは、日本の通商行為に恒常的な支障を齎しうるものであって、それは、択捉あるいは樺太の住民たちの口から、日本人たちは通商行為の実施を願っているという言葉聞き及ぶまで、その支障を継続させる旨、通知せざるを得ないのである。（「通商実施の希望を、意思表示せよ」の意か？）
- \* **Les Russes ayant causé cette fois si peu de dommage à l'Empire du Japon, ont voulu seulement leur montrer par cela**  
今回、ロシア側の要員は、日本帝国に対して僅少の支障を実施して見せたが、それによって我々が示したい本意は.....
- \* **que leurs Etats du nord peuvent toujours être investis et qu'un plus long entêtement de Gouvernement du Japon peut lui faire perdre ces terres.**  
その諸国の北方領域地帯は、常に我々が実情調査しうるところであり、日本国政府の、これ以上の長期にわたる頑迷さは、同国をして、それらの土地を喪失せしめうるものである。（近いところだから、場合によっては、その地帯は、わが国に帰属させることも出来るのだ。）



- \* フランス語の原文を英文に試訳したもの。（この場面では、英語による論議はまだ一般的ではなかったが、現今、英語による、この種の文書の比較分析を行うことが多くなって来ているので、原文のフランス語を、そのニュアンスを尊重しつつ、試みに、英語に置き換えてみた。）

**To the Governor of Matsumae,**

**The neighboring relation between Russia and Japan makes them hope to have a friendly commercial relation for the true welfare of subjects of the latter power. With this reason, an ambassador has been sent to Nagasaki. But the refuse he got made him feel offending for Russia and the realities of commercial activities by the Japanese in the Kuril islands and Sachalin which depend to the Russian empire have forced finally this Empire to take other measures that mean everything, that Russians can always make damages on the commercial activities to Japan until otherwise they are asked by the habitants of Ourope or Sachalin that the Japanese finally ask them in the commercial lives. The Russians giving very small damage to the Japanese Empire, wish to show by these actions that their northern part of these countries can always be investigated and that one longer entêtement of the government of Japan can make them lose their lands. (試訳：長谷川)**

## 歴史点描（当時の国際情勢の一側面）

人類が、歴史上、生物学的に発生、進化してきた過程で、様々な人種が生まれ、地理的な環境に順応しながら生き続けて、今日の人類の文化的な現象が編み上げられて来た。この時代……極東の一島国日本の外側では、ユーラシア大陸の西部で活躍する、スラブ系民族がロシア帝国を形成して西欧社会に存続を続けて来ていたが、十九世紀の初頭はまた、地つつ、新しい歴史時代を編み上げつつある時代でもあった。その頃の日本とロシアを取り巻く諸情勢の中の、本件に関する動静と思われるものを数件選び出して、このテーマの立体的な理解の一助として列挙してみたい。

当時、海運や人間の交流が活発化して、遭難や、意図的な航海の果ての偶然的邂逅など、地球上の人類は、新しい接触の世紀を迎えていたと見られる。紀州藩の献上米を江戸へ運ぶ途中、暴風で、アリューシャン列島まで流された、伊勢、鈴鹿の廻船海運業者、大黒屋光太夫の頃、フランス人も、「地球」、彼らの言う「プラネット（惑星）」とか「大地（ラ・テール）」という概念に目覚めて、国王が下賜した資金を用いて、太平洋を、緯度で、東から西へ赤道の南北二十度の範囲を「探索」し、太平洋で、タヒチやニュー・カレドニア、ブーガンヴィル（ブーガンヴィル）などの諸島を「発見」、「領有」し、更に、北方は、樺太（サハリン）や宗谷海峡へも来ていた。スエズ運河開鑿者レセップスの祖父？も、その地へ来ていて、そこを彼らは、何故か「デトロワ・ド・ペルル（真珠海峡）」と称し、フランス人は、そこを、今でもそう呼んでいる由である。

また、ロシアによるユーラシア大陸の、シベリア方面への「東進」には、背後に、イギリス、ドイツ、オランダ、北欧諸国、西ヨーロッパの王家末裔や、新興ブルジョワ層で構成する上流社会で活発化してきた「社交界」での「夜会」などの衣裳の、毛皮の外套や上着の急速で膨大な需要があった。又、ナポレオンのモスクワ遠征など、軍隊の、冬季も含む大規模移動には軍装として、大量の毛皮を必要とする事態を生み出していた。そのため、衣裳関係業者は、巨利を求めて、シベリアの原野の奥深くまで、狐、熊、豹、テンなど、体毛を利用できる動物の毛皮を追って活発な狩猟を展開した。その追跡の先に太平洋岸があり、北洋、北極圏の海の島々に生息する白熊やアザラシの皮も彼らの魅力となった。その需要の魅力の矛先はオホーツクからアリュー・シャン列島の島々にも及び、アラスカから北米大陸、カナダ領にまで及び、地球の北部寒冷地帯を覆うものだった。

これらは数世紀前、スペインとポルトガルが行なった、海洋航海技術を前提とした「地球の東西分割」とは異なる大規模なものとなった。スペインの狙いは宝石、貴金属、主として、銀の獲得であったし、ポルトガルの場合は、エンリケ王航海王に端緒は見られたが、外地、外国支配は自国民の数の少なかった

ことが隘路となって、現地のボスの懐柔までは成功したが、広範な土地の「征服、支配」が出来なかった。そして、それらは、歴史的には、中、南米以外では、「一過性」のものとして世界史の流れの中に埋没した。

それと並行して行なわれた、フランシスコ・デ・ハビエル（ザビエル）やイグナチウス・デ・ロヨラなどによるキリスト教の布教活動は、日本の近世史を大きく揺さぶるものであった。そして、それは、魂の救済という論理を通して、日本の地方封建領主による「教会」への「土地の寄進」を生むようになり、封建的支配の基盤である、土地の喪失さえ意味するようになり、江戸期に入って徳川幕府による、徹底した「キリシタン弾圧」にまで発展した経緯がある。また、その反作用的な現象として、国内の日本人を、「宗教治安上」仏教徒であることが当然と見て、彼らに、どれか特定の寺に「宗旨登録」に似たことを強制し、「旦那寺」の慣行が蔓延した。それは、単に「非クリスチャン」であるとの態度証明に過ぎなかったのが、それが、僧侶たちを、当時の民衆の、「魂、精神の管理者」として、一種の社会的な「聖職者」と見る傾向を呼び、間もなく、僧侶に対する社会的な安逸生活の場の提供となり、彼らの世俗的な腐敗の遠因ともなった。そして、同時に仏教が個人の精神の高遠な宗教心とは無関係に、広範な習俗風土的な背景と化し、所謂「葬式仏教」に転落し、「戒名料」、「お布施」など、精神世界の礼拝儀式の金銭的な評価と階層化が悲劇的に進み、先祖の供養や「来世」の幸せの、僧侶による、金銭との交換や、その格付けの蔓延（「地獄の沙汰も、金次第」）を呼び、一種の社会問題の温床となっている。

この問題は、日本人にとって、心の哲学としての、個人的な信仰や、人生観、人生の浄福観、生きる意味や目的などについての個人的な哲学思考の問題とか、宗教と民衆に関する、現実の大きな問題として、誰かに、別途、分析を求める時期が来ていると思われる。

イギリスによる、北米大陸、中近東、アフリカ大陸北部、インド、オーストラリア、東南アジア地域などの「経営」も、オランダによる「インド・ネクソス（インドネシア）」地域の植民地経営の経緯と実態などと併せて、大きな、別の観察、研究の、個々の、一つの大きなテーマであると思われる。

「インド・ネクソス」に関しては、インドやアフリカ地域と並んで、西欧世界の人口増加による食肉の需要の爆発的な増大とか貯蔵食肉の味覚的劣化への対応としての香辛料の確保に刺激されたものではあったが、支配地域の地理的価値に関して、結果的には、国際的活動の便益という、極めて実利的な側面から地政学の考究対象になって来ている。

参考文献：

- 「仏蘭西学のあけぼの」 富田 仁 カルチャー出版  
「フランス語事始 ～村上英俊とその時代～」  
富田 仁 NHK ブックス 441  
「陸軍創設史～フランス軍事顧問団の影～」  
篠原 宏 リプロポート社  
「ボアソナード」 \* 岩波新書  
「明治維新の舞台裏」 石井 孝 岩波新書 369  
「世界史のなかの明治維新」 芝原 拓自 岩波新書  
「明治維新と西洋文明～岩倉使節団は～何を見たか」  
田中 彰 岩波新書 862  
「明治のフランス文学～フランス学からの出発～」  
富田 仁、赤瀬 雅子 駿河台出版社
- 「Indochine 1940-1955 la fin d'un rêve」  
(インドシナ 1940 - 1955 年『ある夢の終わり』) ジャック・ド・フォラン  
ペラン社  
「Le Japon et La France」 フランス大使館資料(1974年)  
「坂の上の雲」「菜の花の沖」(小説) 司馬遼太郎  
「フランス人の幕末維新」 M.ド・モージュ 他 有隣新書

他

## 報告者の背景

長谷川 晃 フランス語などに関する経歴 三重県桑名市出身（昭和七年生）

名古屋大学経済学部経済学科経済史専攻 塩沢君夫教授（日本経済史）ゼミ

卒論 「日本資本主義成立の論理」（昭和 30 年卒）（フランス語は自習）……

当時、経済学部は、講読する原書の関係で、強制ではなかったが、ドイツ語を選択するのが普通だった。ゲーテもリルケもマルクスも原書で読んだ。そのため、フランス語は市井の、名古屋の大学教授（名古屋大学、南山大学）たち主催の夜間授業で学ぶ。

NHK 在職中（昭和 30 年 1955 平成元年 1989）、一年間、フランスに留学（昭和 36 - 37 年）

パリ、国立フランス語学校「アリアンス・フランセーズ」でフランス語の研修を第三部まで終了。「非フランス人に、非フランス領土内でのフランス語の教授の許可」の認定を受ける。フランス西部ノルマンディー地方、マンシュ県、国立カン大学法学部自由聴講生として一年間在籍。フランス農業史、ノルマンディー法制史専攻。

帰国後、NHK 解説委員室、政治経済番組部、その間、訪日したポンピドゥ仏大統領、ヴァレリー・ジスカル・デスタン仏蔵相（ほか、モードリング英蔵相、スカルノ・インドネシア大統領、ラスク米國務長官、ミコヤン・ソ連邦第一書記、米 P・W・キャラウエー沖縄高等弁務官、ドイツ連邦共和国ゲアハルト・シュレーダー首相）などの放送番組出演の演出に従事。

外信部テレビ衛星中継担当（アポロ月面活動関連活動、天皇訪米・訪欧、日中国交回復のための田中首相の北京訪問、沖縄返還式日米二元中継、歴代首相の各国訪問、先進国サミット出席の速報又は同時中継、頻発した日航機ハイジャック事件の素材等の速報など）

二年間（52 年 - 54 年）パリ特派員。帰国後、国際局フランス語番組担当管理職、欧米部長、編成部長。停年直前の二年間（87 年 - 89 年）JICA へ出向、インドネシア政府情報省顧問、「ラジオ・テレビ放送訓練センター」プロジェクト・リーダー。ジャワ島、ジクジャカルタ市に昭和 64 年（平成元年）末まで二年間在住。

ジャワより帰国後、「国際総合研究学会（前日本国際開発学会）」に所属、現在、副会長。

NHK 勤務の末期、国際局欧米部長の立場で、東京大学教授福井芳男氏、中央大学教授田島宏氏らで構成する「実用フランス語検定協会」設立のプロセスに、フランス語を実際に、社会的に駆使している機関の代表の一人として参加。後に文部省認定の「仏検」となったが、検定協会時代には、上級の面接試験官として、フランス大使館文化部の要員と共に、受験者の審査を行なった。白水社の「実用仏和辞典」の「放送、マスコミ」に関する部分の執筆を担当。鎌倉日仏協会、横浜日仏友好会に所属。料理飲食専門家団体連合会代表、日本ソムリエ・スクール副学監（仏、英、伊、独語）。

現在、鎌倉と、横浜市栄区で、フランス語初級、中級の講座を担当。鎌倉市腰越で「インドネシア語講座」を担当。鎌倉市ボランティア通訳（英語、フランス語、インドネシア語）その他、可能な報告テーマ：「ラジオ国際放送の素顔」、「テレビ衛星中継の舞台裏」